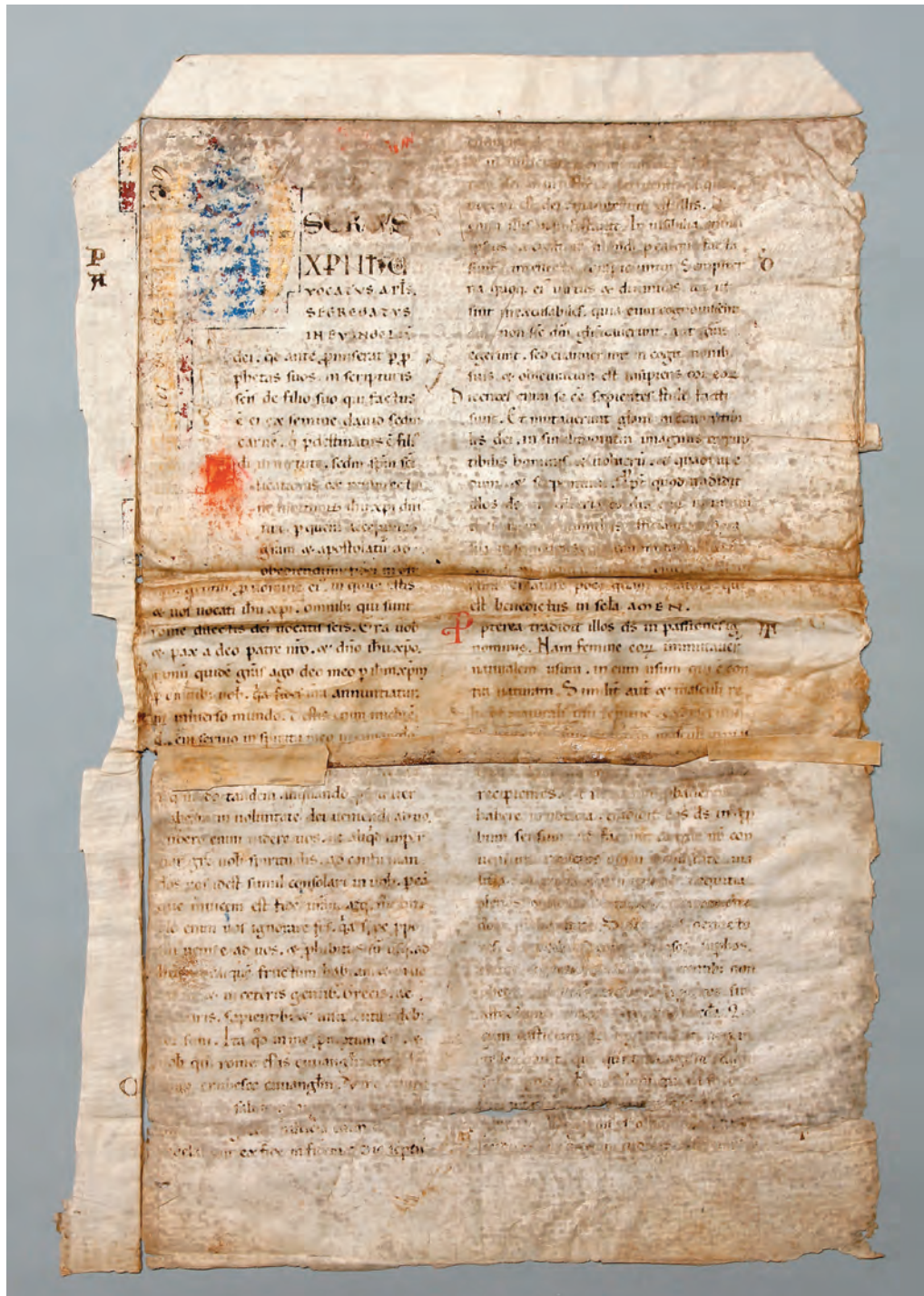


西南学院大学博物館所蔵

「12世紀ラテン語聖書写本『ローマの信徒への手紙』」

下園 知弥



12世紀ラテン語聖書写本「ローマの信徒への手紙」

12世紀／ヨーロッパ（西欧）／羊皮紙に手彩／西南学院大学博物館蔵 法量：48.2×31.5cm

ipsum condempnas. eadem enim agit
 que iudicat. Semis enim qui iudicium d
 est. scdm ueritatem in eos qui talia agunt.
G Exultas aut. o homo q iudicas eos qui
 talia agunt. & facis ea q tu effugies
 iudicium d. an diuitias bonitatis eius.
 & patientie & longanimitatis contempni
L guoras qm benignitas d ad penitentia
 te adducit. Scdm duritiam aut tuam.
 & impenitens cor. thesaurizat tibi ira
 in die ire. & reuelationis iusti iudicij
 d. qui reddet unicuiq. scdm opa eius.
H is quidem qui scdm patientiam boni
 opis. glam & honorem & incorruptione
 querentib: uitam eternam. his aut qui
 ex contentione. & qui no adquireunt
 ueritatem. credunt aut iniquitati. ira.
 & indignatio. & tribulatio. & angustia.
H in omnem animam hominis operantis
 malum. iudei primum & greci. Glia au
 tem & honor. & pax omni operanti bonu.
 iudeo primum & greco. Non est enim
 primum acceptio apud dm. Quicumq.
 enim sine lege peccauerunt. sine lege
 peribunt. Et quicumq. in lege peccauer.
 p legem iudicabunt. Non enim audito
 rei lege iusti sunt apud dm. sed facto.
 rei lege iustificabuntur. Cum enim gen
 tet que legem non habe. & naturalit ea
 que lege sunt faciant. huiusmodi lege

dunt opus legis scriptum in cordibus
 suis. testimonium reddente illis consci
 entia ipsoz. & int se inuicem cogita
 tionu accusantium. Aut etia defendentiu
 in die cum iudicauerit ds occulta homi
 num scdm euanglm meum p sm: xpm.
B Et ut iudeus cognominatus. & regeus
 in lege. & glaris in deo. & nosti uoli
 tate ei. & plus uoluit in iustitiam ple
 ge. confidens te. & dicitur cecoz ee
 lumen eoz. qui in tenebris sunt. crudi
 torem insipientiam. & agilita infantu.
 habentem formam sentie. & ueritate
 in lege. O in ergo. cum docet. respiciam
 non docet. qm predicat non fingendum
 finaris. Qui dicit non merendum me
 charis. Qui abominatis idola. facile
 quum facis. Qui in lege gloriaris. p

preuaricatione legis dm inhonoras.
H omer enim dei p uos blasphematur in
 ter gentes sic scriptum est. Circumcisio
 quidem potest. si legem obserues. Si aut
 preuaricato legis sis. circumcisio tua pre
 putium facta est. Si igitur pprium
 iusticias legis custodiat. nonne pprium
 illius in circumcissionem reputabitur.
E t iudicabit quod ex natura est preputium
 legem consumans. te qui p litteram &
 circumcissionem preuaricato legis es.
H on enim qui in manifesto iudeus est.
 neq. que in manifesto est in carne cir
 cumcisio. sed qui in abscondito iudeus.
 & circumcisio cordis in spu non littera.
 cui laus non ex hominib: sed ex deo
 est. Quid ergo amplius est iudeo. aut
 que utilitas circumcissionis. Multum
 p omne modu. Irimum quide. quia
 credita sunt illis eloquia dei. Quid
 enim si quidam illoz non crediderunt.
H umquid incredulitas illoz. fidem dei
 euacuauit. Absit. Est aut ds uerax.
 omnis aut homo mendax. Sic i
 est. Ut iustificaris in sermone. &
 & uincas cum iudicaris. Si aut iniqui
 tas ma de iusticia commendat. quo
 dicemus. Humquid aliquis est ds q
 infert uiam. Scdm homine duo. Ab
 sit. Alioquin. quomodo iudicabit ds

abundauit in meo iudicio in glam ip
 sius. quid adhuc & ego tanqua pecca
 tor iudicor. & non sic blasphematur. &
 sic aiunt nos q da dicere. faciamus
 mala ut ueniam bona. Quoz damp
 natio in a est. Quid igitur. Precllam
 eos. Nequaqua. Causati enim sum iu
 deos. & greci. omis sub peccato ee. sic
 scriptum est. qui non est iustus qqua
 non est intelligens. non est reqrens dm.
O n declinauerunt in mal. inutiles facti
 sunt. non est qui faciat bonu. non est
 usq. ad unum. Sepulcrum patens est
 guttur eoz. linguis suis dolose age
 bant. uentrem aspidum sub labris eo
 rum. grum of maledictione & amari
 tudine. plenum est. ueloces pedes eoz
 ad offundendum sanguine. Contricio

資料裏面

1. 資料概要

西南学院大学博物館所蔵の本資料（登録番号：C-b-113）は、12世紀にヨーロッパ（西欧の何処か）で制作されたと推定されるラテン語聖書写本の零葉である。素材は羊皮紙（動物は不明）であり、表面および裏面に手書きのラテン語で新約聖書「ローマの信徒への手紙」の冒頭から第3章の途中まで記されている。手書きの文字の大半は黒色のインク（没食子インクか）で記されているが、一部の頭文字（イニシアル）には黒色以外の顔料が使用されており、また冒頭のイニシアルPにはかつて貼られていた金箔（ギルディング）の痕跡が見て取れる。テキストがはっきりと読み取れる箇所も残っているものの、全体にわたって紙面の損傷と顔料の剥落が生じており、後世に書冊の装丁の一部として再利用されていた痕跡も認められる（中央を走る二本の深い折り皺は、おそらく書冊の背の部分であろう）¹。つまり、決して良い状態で保存・継承されてきた写本ではない。

以上が、本資料を一見して読み取れる情報である。資料の状態に鑑みれば、中世の写本の実物である点を加味しても、史料的价值が非常に高いとはいえない。とはいえ、時代背景をふまえて、書体や剥落した部分に関する考察を深めることで、いくつか興味深い事実が浮かび上がってくる。

本資料紹介では、まず、資料の歴史的価値を明らかにするために、12世紀における写本制作の時代状況について概説したのち、書体の変遷史を確認する。次いで、本資料の大きな特徴の一つであるイニシアルに関する考察の手がかりとすべく、12世紀を中心としたロマネスク期におけるイニシアルのヴァリエーションについて確認する。そして最後に、本資料の書体的・形態的・装飾的特徴について総括したい²。

2. 12世紀における写本制作

印刷文化が到来する以前、西洋中世において書物

は写本として制作されていた。そして写本制作の中心地は、ある時期までは修道院写字室であったと考えられている。この状況が大きく変化するのは、修道院ではなく世俗の書記者・書記工房が台頭して以降のことである。この変化は中世後期には確定的な現象となっているが、むしろそれは、ある年代に一気に起こったわけではなく、徐々に起こっていったと考えるべきである。たとえば写本学者クリストファー・ド・ハメルは、1100年までに修道院の書物生産の場に世俗の書記者・装飾芸術家が関わるようになっており、1200年までには世俗の書記工房が平信徒に写本を販売していたことに言及している³。また、『12世紀ルネサンス』の著者ハスキンスは、12世紀の修道院における写本制作の変化として、雇われの写本制作者が多くなっていったこと、修道士の筆写係さえ雇われ仕事をするようになったことに言及している⁴。彼らの言及が示しているように、12世紀は写本制作にとってまさしく変容期であった。その変容は、一言で言えば「職業としての写本制作者」の出現であり、中世後期における世俗の書記工房隆盛の前触れであった。

写本の制作者から制作された写本の側に焦点を移すと、現存する12世紀の写本として、さまざまな「装飾写本 illuminated manuscript」の逸品に出会うことができる。美術史においては「ロマネスク期」にあたる12世紀は、今日の歴史研究・美術研究では——かつての「暗黒の中世」観とは異なって——独自の優れた芸術様式を花咲かせた時代として評価されている。写本においてもまた、『ウィンチェスター聖書 *Winchester Bible*』（モルガン・ライブラリー所蔵）や『ハインリヒ獅子公の福音書 *Evangeliar Heinrichs des Löwen*』（ヘルツォーク・アウグスト図書館所蔵）などの壮麗な装飾写本が知られており、これらの写本ほど有名でなくとも、世界各地の博物館・図書館に保存されている12世紀写本には優れた芸術品と評価できるものが数多く存在する。

一方で、シトー会修道院の写字生による意図的に装飾性を控えた写本もまた、この時代を象徴する一

つの流れである。シトー会の修道院長クレルヴォーのベルナルドゥスによる修道院内で行われる過度な装飾に対する批判⁵は、豪華絢爛な装飾写本だけがこの時代の志向ではなかったことを示唆している。事実、12世紀中頃に制作されたシトー会写本『クレルヴォー大聖書』(Troyes, BM, 0027 [Abbaye Notre-Dame de Clairvaux])は、「モノクローム monochrome」と呼ばれる単色の下地に白色のみで表わされた極めて個性的な装飾文字が描かれており、シトー会士が写本制作に際して過度な装飾を避けていたのは明らかである(もっとも、そのシトー会修道院すらも、その後間もなく複数の色彩を使用した装飾文字を復活させており、時代の主流に合流していったという事実には注意が必要である⁶)。したがって、この12世紀という時代は、「装飾の華やかさ」において時代特有の個性が明確に認められるものの、その個性は時代全体を支配する形式とまでは言えず、多種多様な装飾写本が各地で制作されていた時代として考えなければならない。

写本全体から「聖書写本」に焦点を絞ると、12世紀という時代の興味深い点が一層明らかとなる。クリストファー・ド・ハメルは、11世紀から12世紀頃までの聖書写本を「大型聖書 Giant Bible」に代表させている⁷。実際、この時代に制作された聖書写本の完本・断片の法量を確認すると、後世に比して大判のものが多く制作されていたことがわかる。この傾向が大きく変わるのは13世紀の第2四半世紀以降であるが、技術革新によって極薄羊皮紙が生産可能になり、極端に縮小されたゴシック体が発案されたことがその変化の技術的要因である。

ではなぜこのような技術革新が生じたのかと問うならば、この時代の知的環境に答えを求めることができるだろう。というのは、12世紀から13世紀にかけては大学 *universitas*の草創期から発展期にあたり、大学神学部で特に必要とされていたのが一冊で総覧できるタイプの聖書、すなわち「パンデクト聖書 Pandect Bible」、それも携帯可能なサイズのものであったからである⁸。つまり、13世紀の技術革新以前は、素材と技法の制約上パンデクト聖書はどう

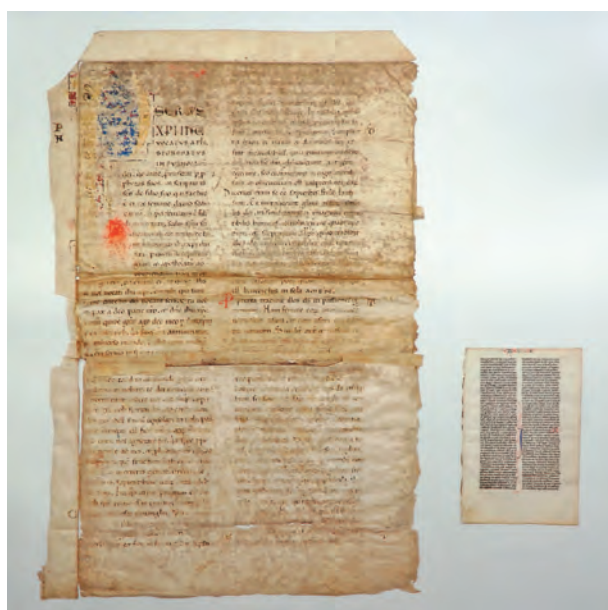


図1 12世紀大型聖書写本と13世紀小型聖書写本の比較

しても大型本となってしまうが、その規格では大学学問には不便であったため、技術革新が求められ、利便性に優れた小型パンデクト聖書が発明された、ということであろう。また、ラウラ・ライトが指摘するように、小型パンデクト聖書は旅する説教師にとっても非常に都合の良い書物であった⁹。そのため、説教師からの需要もこの技術革新の主因に勘案して良いように思われる。いずれにしても、当時の「需要」と「技術」の二要因が聖書写本の形態に大きな影響を及ぼしていたのは確かであろう。

12世紀から13世紀への聖書写本の顕著な変化は、西南学院大学博物館の所蔵資料によっても確認することができる。図1は本資料紹介のテーマであるところの12世紀の聖書写本(左)と13世紀の聖書写本(右)を並べて撮影した写真である。12世紀聖書写本の法量は48.2×31.5cmであり、これに対して13世紀聖書写本の法量はわずか15.0×10.0cmである。むしろ、西洋各地の数多くの工房・写字室において手作業で制作されていたゆえに、12世紀聖書写本のすべてが同資料のように大判だったわけではないし、13世紀聖書写本についても同様であるが、この「法量の変化」は聖書写本の年代を特定する上での一つの観点にはなりうるだろう。

3. 書体の変遷——プロトゴシック体の出現

では次に、写本の「書体」に観点を移したい。12世紀は、書体の変遷においても大きな変化が起こりつつあった時代、すなわち「ゴシック体 Gothic script」の黎明期であった。8世紀末にカール大帝の宮廷学者アルクィヌスによって「カロリング小文字体 Caroline minuscule」が発案されて以降、西洋写本の主要な書体はカロリング小文字体となり、この流行は12世紀まで継続していた。しかし、11世紀より徐々にカロリング小文字体の字形に変化が生じ始め、13世紀には全く違った印象を与える字体、すなわちゴシック体へと移行した。12世紀はちょうどその移行期にあたる時期であり、古書体学で言うところのプロトゴシック体（初期ゴシック体）の登場期に位置付けられる¹⁰。

上記の説明から明らかなように、カロリング小文字体とゴシック体は書体発展の過程において直接繋

がっている二書体であり、その移行期にあたるプロトゴシック体は両者の特徴を備えたものとなっている。つまり、「ゴシック」と呼ばれてはいるものの、この書体はカロリング小文字体の特徴を色濃く留めており、11世紀から12世紀前半頃にかけての写本に見られる後期カロリング小文字体とかなり近い印象を与えるのである（図2-3）。そのため、この二つの書体を区別するのは、場合によっては困難な作業となる。

加えて注意したいのは、西洋写本におけるカロリング小文字体からプロトゴシック体ないしゴシック体への移行は、ある年代・ある地域で一気に起こった変化ではないという点である。プロトゴシック体が現れるようになって以降も、少なくとも12世紀の間は、カロリング小文字体は西欧各地で長らく使用され続けていた。したがって、12世紀のラテン語写本というだけで書体を確定できるわけではなく、同様に、書体の特徴からのみ写本の制作年代を精確に

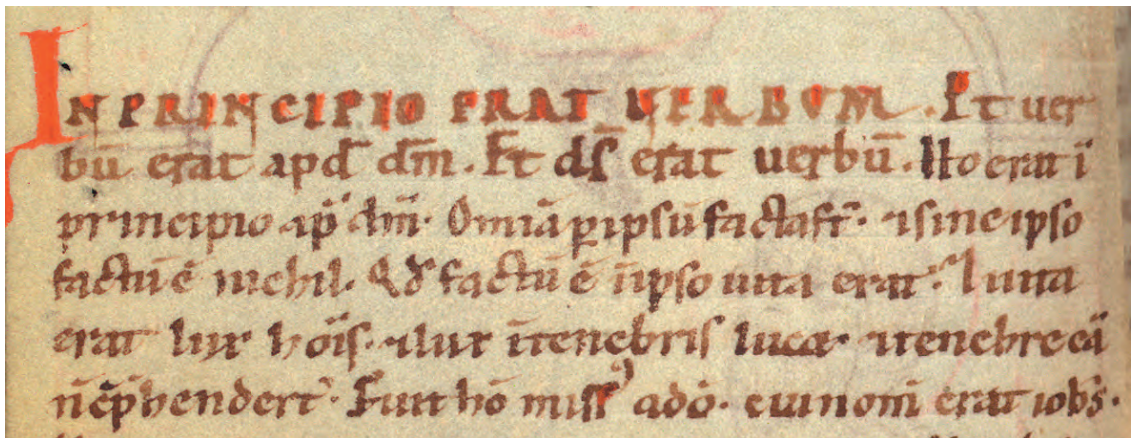


図2（上）
後期カロリング小文字体の写本
The Walters Art Museum, Ms. W.5, f. 95v.
11世紀、ヴェアデン（ドイツ）
Gospels of Abbot Dudenより、ヨハネ伝冒頭部分

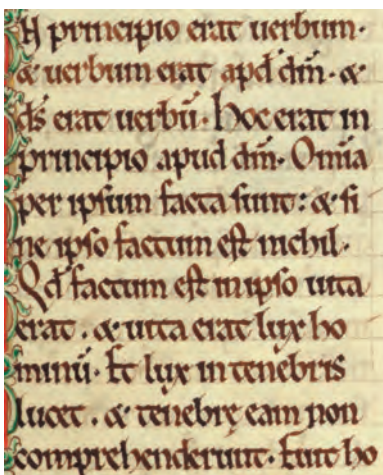


図3（下）
プロトゴシック体の写本
The Walters Art Museum, Ms. W.18, f. 84v.
1130年頃、ロチェスター（イギリス）
Rochester New Testamentより、ヨハネ伝冒頭部分。

特定できるわけでもないのである。ここに12世紀写本を調査する上での一つの困難が存している。

以上のように書体の考察に際して留意すべき点は多々存するが、さしあたり本資料紹介において重要なのは次の点である。すなわち、12世紀写本の中には、カロリング小文字体からゴシック体への書体の段階的変化の過程をうかがい知ることのできる興味深い資料が数多く含まれており、本資料紹介で扱っている写本もまた、そのうちの一つなのだ、という点である。

4. 装飾写本の隆盛——さまざまなイニシアル

現存する西洋中世の写本の中でもとりわけ人々の目を惹きつけるのは、「装飾写本 illuminated manuscript」と呼ばれるタイプの写本であろう。装飾写本とは、写本の紙面——主としてテキストの余白や欄外、あるいは挿絵を描くために予め割かれた空白部分など——に顔料や貴金属などを用いて絵図や意匠を凝らした装飾文字が描かれたものを指し、早くは古代末期から現れるようになり中世から近代初頭にかけて隆盛を迎えている。この種の写本に描かれている装飾は、時代や地域ごとに一定の傾向・様式を見出すことができるため、書体と共に写本の年代推定に欠かせない要素の一つとなっている。

装飾写本の中には「イニシアル initial」と呼ばれる装飾文字が存在するが、これは装飾的に記されているところの文頭の最初の一文字ないし数文字、つまり文字通り頭文字（イニシアル）のことを指す。このイニシアルは、西洋中世において多くのヴァリエーションが生み出されており、写本学・芸術学においてはその類型ごとに特定の名称も付せられている。代表的な例を挙げると、大きく描かれた装飾文字の余白部分に人間や動物を描きこむ「居住イニシアル inhabited initial」(図4)、居住頭文字の中でも特定の主題や場面を示すように人物等が描かれている「物語イニシアル historiated initial」(図5)、描かれている人物等の身体で字形を表現している「体操イニシアル gymnastic initial」(図6)がイニシアル



図4
居住イニシアル British Library, Harley 2801, f. 151.
12世紀、アルンシュタイン（ドイツ）
イニシアルDの余白に狩人と兎が描かれている。



図5
物語イニシアル British Library, Arundel 91, f. 26v.
12世紀、カンタベリー（イギリス）
イニシアルMの余白部分に竜退治をする大天使ミカエルが描かれている。



図6
体操イニシアル British Library, Additional 16984, f. 3.
12世紀の第4四半世紀、オランダもしくはフランス
イニシアルSが怪物の身体で表現されている。

ルの類型としてよく知られている¹¹。

美術史におけるロマネスク期は、シンプルなイニシアルのみならず、上記のようなさまざまなイニシアルが盛んに描かれていた。そのことは、現存する12世紀写本の実物をいくつか検めればすぐさま明らかになる事実である。したがって、12世紀写本の図像分析に際しては、イニシアルの図像が解読に耐えうるかたちに残されている写本はもちろんのこと、一部剥落してしまった写本の解読においても、上述の類型が一つの手がかりとなる。



図7 a,e,d,gの部分拡大図



図8 p,m,n,rの部分拡大図



図9 「キリスト・イエス」の装飾文字

5. 本資料の書体的・形態的・装飾的特徴

これまで確認してきた12世紀写本文化の背景をふまえた上で、西南学院大学博物館所蔵の「12世紀ラテン語聖書写本『ローマの信徒への手紙』」について、その注目すべき特徴を分析・考察してみたい。

第一に、本資料の書体についてであるが、多くの特徴が後期カロリング小文字体と一致する。たとえばa,e,d,gのような円形部分のある字形は、全体的に曲線部分が丸みを帯びており、ゴシック体のような多角で表された曲線とは異なっている（図7）。ではこの写本の書体はカロリング小文字体と断定して良いかと言われると、判断に苦しむ部分がある。それはたとえば、p,m,n,rといった字形である（図8）。これらの字形の角ばった縦線などは、カロリング小文字体よりはゴシック体に近い印象を与えるものであり、これらの字形だけ見るとゴシック体と判断したくなる。ここで想起したいのは、ゴシック体はカロリング小文字体が徐々に変化して生まれた書体であるからして、この二書体の境目を明確に画定することは困難だという事実である。そしてこのような「あわい」の書体こそが、古書体学や写本学において「プロトゴシック体」と呼び習わされる書体なのである。

したがって、結論としては、本資料の書体はカロリング小文字体とゴシック体の双方の特徴を備えた「あわい」の書体、すなわちプロトゴシック体ということになる¹²。



図10 イニシアルPの部分拡大図

なお、冒頭のテキストや欄外のガイド・レター¹³、一部単語（amen等）は大文字で記されており、大文字部分はこの時代の慣例に即してアンシアル体となっている。また、イエス・キリスト（キリスト・イエス）の名前については、中世ラテン語写本の多くに見られるように、文字の縦線の一部に（本来不要な）横線を引いて十字架の形態にした装飾文字で記されている（図9）。この装飾文字“XPI IHSU (CHRISTI IESU)”のSには、文字の先端部分が植物のような特徴的な意匠となっており、現時点では特定に至っていないが、制作地域を推定する重要な判断材料であるように思われる。

第二に、資料のサイズに注目したい。本資料のサイズは48.2×31.5cmとなっており、この規格は、たとえばモルガン・ライブラリー所蔵の聖書写本MS M.11と非常に近い。また、大英図書館のような他の欧米図書館においても、同年代・類似規格の聖書写本は複数所蔵されている。したがって、他館が所蔵する断片ないし完本の写本から本資料の元々のすがたを推定することは可能である。むしろ、裁断された写本断片であるため、印刷本とは異なって、原本の精確な構成・規格について断定することは不可能である。確実に言えることは、小型パンデクト聖書が登場する以前、書体から考えれば12世紀に、比較的大判で制作されていた聖書写本の一部だと言うことである。

第三に、イニシアルについて考察したい。本資料には二箇所、イニシアル*P*の装飾文字が認められる。一つは表面・左段最上部の剥落してほとんど見えなくなっている*P*——これは『ローマの信徒への手紙』の冒頭テキストPaulus servus christi iesuの最初の文字*P*を表している——、いま一つは表面・右段中央の赤文字で記された*P*——これは同書第1章26節のPropterea tradidit illosの最初の*P* (ro)を表している——である。後者の*P*については特筆すべき点は無く、いわゆるルブリック¹⁴と呼ばれる赤インクで記された強調文字のイニシアルである。他方、前者の装飾文字については考察の余地がある。

先述したように、12世紀写本におけるイニシアル

にはさまざまなパターンがある。本資料の冒頭の装飾文字*P*がイニシアルの一種であることは明らかであるが、問題は「複数あるイニシアルの種類のどれに該当するのか」という点である。言い換えれば、この大部分が剥落してしまって顔料のごく一部しか残っていない装飾文字は、元々どのような図像だったのか、という問題である。この問題について、現在残されている痕跡（図10）を確認しつつ、これより考察していきたい。

本資料のイニシアル*P*には、少なくとも二種類の顔料と金箔を使用した痕跡が認められる。また、イニシアル部分の輪郭を定めているガイドラインも残されているため、概形を再構成するのは難しくない。おそらくその概形は、ガイドライン部分に沿って赤色の顔料で下地（背景）が塗られており、その上から金箔（ギルディング）で*P*の線描部分が表現されている、というものであろう。実際、細部や使用している顔料こそ異なるものの、同様の手法でイニシアル*P*が描かれている12世紀の写本も存在する（図11）。

現在残されている部分から再構成するのが難しいのは、*P*の円形内側の余白部分である。この余白部分に何が描かれていたのかは、剥落が激しいため、現存部分を頼りに確定させるのはほぼ不可能である。しかしながら、この部分を推測することは本資料の考察において重要な意義を持つ。なぜならば、ここに何が描かれているかによって、イニシアルのどの種類であるのかが変わってくるからである。すなわち、全面が塗りつぶされているか何らかの文様のみが描かれている場合にはシンプルな「イニシアル」となり、人物や動物が特定の文脈・物語無しに描かれている場合には「居住イニシアル」となり、何らかの文脈・物語を示すかたちで人物や動物が描かれている場合には「物語イニシアル」となるのである。

それでは、本資料のイニシアルはどの種類であると考えられるだろうか。これらの種類はいずれも同時代の写本で確認されているため、可能性としてはすべての類型が当てはまりうる（図11-13）。そして

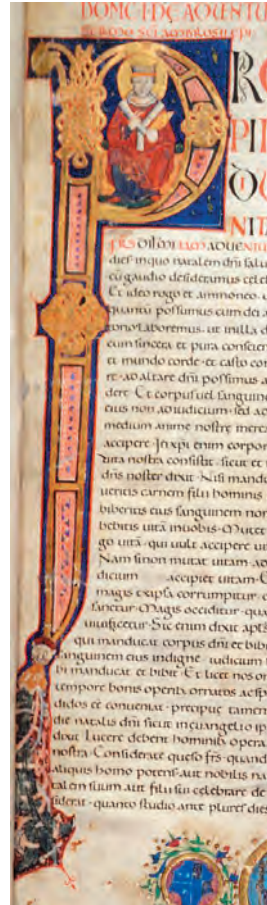


図11 (左)
イニシアルP
British Library
Arundel 370, f. 1.
12世紀後半
イギリスもしくはフランス

図12 (中)
居住イニシアルP
British Library
Harley 2833, f. 119v.
12世紀第3四半世紀
フランス (おそらくアンジェ)

図13 (右)
物語イニシアルP
(聖アンブロシウス)
British Library
Harley 7183, Vol. 1, f. 1.
12世紀第2もしくは第3四半世紀
中部イタリア (フィレンツェか)



図14 (左)
物語イニシアルP
(聖パウロ)
British Library
Royal 3 C III, f. 3
13世紀前半
イギリスもしくはフランス

図15 (右)
物語イニシアルP
(聖パウロ)
British Library
Royal 3 C I, f. 161.
12世紀第4四半世紀
イギリス

資料のイニシアル部分の剥落が激しいゆえに、いずれの類型でも再構成することが可能であろう。そのうえで、筆者が最も可能性が高いと考えるのは「物語イニシアル」である。その理由は次の二つである。

第一に、本資料が新約聖書の『ローマの信徒への手紙』だという点である。物語イニシアルは、必ずしもというわけではないが、イニシアルが記されているテキストの原著者ないし関連人物が描かれるという傾向がある。そして『ローマの信徒への手紙』をはじめとする「パウロ書簡」の場合、著者は聖パウロなので、これらの書簡ないしその註解書の物語イニシアルにはしばしば聖パウロの図像が描かれるのである（図14-15）。

第二に、現存する顔料に青色と赤色が認められる点である。西洋中世の図像における聖人・キリストの祭服は、しばしば青色の下着と赤色の上着で表現される¹⁵。この傾向は聖パウロも例外ではなく、パウロの祭服がこの二色で表現されている作例は多数存在する（図14）。したがって、本資料のイニシアル部分に残されている青色と赤色の顔料の一部は、聖パウロの衣装の表現であった可能性が考えられる。

ただし、いま述べた解釈には難点もある。まず、第一の点についてであるが、写本の物語イニシアルには必ずしも著者や関連人物の図像が採用されるわけではない¹⁶。『ローマの信徒への手紙』の写本についても、たとえば大英図書館のRoyal 4 D VIの当該箇所（f.19r.）では、冒頭のイニシアルPの中に聖パウロではなくイエス・キリストの図像が描かれている。また、本資料のイニシアルはそもそも物語イニシアルではない可能性すら考えられる。その場合、Pの余白部分に描かれている図像はむしろ聖パウロではない。

第二の点についていえば、確認できている顔料のみでは人物の描写は不可能だという問題がある。つまり、人物を描くためには肌色の顔料が不可欠であるが、現存する図像からは肌色の顔料を視認することができないのである。肌色の箇所の顔料だけが完

全に剥落してしまった、という可能性もありうるが、初めからこの図像には肌色の顔料は使用されておらず、青色と赤色のみで彩色されたシンプルなイニシアルであった可能性も十分に考えられる。

このように、本資料のイニシアルの解釈には多くの問題点が残されており、解決のためには同年代の装飾聖書写本を更に調査する必要があるだろう。したがって、本資料紹介で確定的な結論を出すことはできないが、それでもやはり、聖パウロの図像が描かれた物語イニシアルの可能性があるということは強調しておきたい。

おわりに

本資料紹介では、西南学院大学博物館が所蔵する12世紀聖書写本の零葉について、現状の分析・考察に基づくおおよその特徴を指摘した。零葉は孤立した断片であるからして、その全容を再構成するためには、同時代の同類型の写本の参照が必須となる。とはいえ、本資料の失われたイニシアルの図像のように、参照してなお本来のすがたを推測するのが難しい箇所も存在する。自館の所蔵資料のディテールを調査研究によって解明しきれないことは学芸員として遺憾であるが、イニシアルの図像は世界中の図書館に数多の作例が保存されているため、それらの作例と比較することで今後解明される見込みがないわけではない。

西南学院大学博物館には、本資料だけでなく、複数の西洋中世写本の零葉が収集・保存されている¹⁷。その多くは、未だ詳しい資料調査が行われておらず、中には資料の原本が特定されていないものすらある。これらの写本の資料調査を行うこともまた、所蔵館の今後の課題であることを、学芸員の自戒として最後に書き留めておきたい。

註

- 1 不要になった羊皮紙写本の断片が後世の印刷本の装丁として再利用されることは珍しくなく、写本学の用語ではこのような写本断片をbinding wasteと呼ぶ。binding wasteの実例は、たとえばプリンストン大学図書館の所蔵品で確認することができる（プリンストン大

- 学図書館ホームページ・特設ページHand Bookbindings : https://library.princeton.edu/visual_materials/hb/cases/bindingwaste/index.html 筆者閲覧日：2021年12月29日)。なお、西南学院大学博物館の所蔵資料では、当該資料 (C-b-113) のほか、「12世紀ラテン語説教写本」(C-b-117) や「ミサ典書零葉」(C-b-140) もbinding wasteとして使用されていた写本であると考えられる。
- 2 本資料紹介で引用している画像 (図1-15) は、西南学院大学博物館所蔵資料については筆者撮影のものを使用し、他館 (British LibraryおよびThe Walters Art Museum) 所蔵資料については所蔵館ホームページで公開されているデジタルアーカイブより引用した。
 - 3 Christopher de Hamel, *Medieval Craftsmen: Scribes and Illuminators*, British Museum Press, London, 1992, p. 5.
 - 4 C. H. ハスキンス『十二世紀ルネサンス』別宮貞徳・朝倉文市共訳、みすず書房、56頁。
 - 5 *Apologia ad Guilelmum abbatem*, c. 12, 28. (クレルヴォーのベルナルドゥス「ギョーム修道院長への弁明」杉崎泰一郎訳、上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成10 修道院神学』平凡社、1997年、482-484頁)
 - 6 Diane J. Beilly, "Art", in Mette Birkedal Bruun ed., *The Cambridge Companion to The Cistercian Order*, Cambridge University Press, 2013, p. 130.
 - 7 Christopher de Hamel, *The Book: A History of the Bible*, London, Phaidon Press, 2001, pp. 64-91.
 - 8 12世紀から13世紀にかけての聖書写本の特徴および時代背景については以下の文献を参照。Frans van Liere, *An Introduction to the Medieval Bible*, Cambridge University Press, 2014, pp. 37-40.; Laura Light, "The Thirteenth century and the Paris Bible", in Richard Marsden and E. Ann Matter ed., *The New Cambridge History of the Bible, volume 2: From 600 to 1450*, pp. 380-383.
 - 9 Laura Light, *op. cit.*, p. 383.
 - 10 カロリング小文字体からゴシック体への発展過程については、ベルンハルト・ビショッフ『西洋写本学』佐藤彰一、瀬戸直彦共訳、岩波書店、2015年、175-187頁を参照。
 - 11 これらのイニシアルの中には、判然と区別できるものもあれば、複数の類型に跨っており類型を断定できないものもある。特に、主題の明確さや物語性の有無のみ分けられる居住イニシアルと物語イニシアルの区別は必ずしも明瞭ではない。たとえば本論文図4の「狩人と兎」のイニシアルは、所蔵館の大英図書館はメタデータでinhabited initial (居住イニシアル) として記録しているが、このイニシアルに「一人の狩人が二匹の兎を狩らんとしている場面」といった物語を読み込むことも可能であり、そのように解釈する場合、このイニシアルは物語イニシアルということになる。同様に、聖人の姿が描かれるだけで明確な主題が定められていると見なされて物語イニシアルに区分されるのが慣例であるが、聖人伝における特定の場面を描いているのでなければ、聖人の図像も居住イニシアルに区分しても問題ないと思われる。いずれにせよ、描かれたイニシアルを既存の特定の術語と一対一対応させることにさほど意味はなく、重要なのは「何が描かれているか」を分析することであり、イニシアルの類型は図像解釈の方向性を示唆する参考情報の一つに過ぎない。
 - 12 本資料紹介では当該資料の書体を「プロトゴシック体」として規定しているが、プロトゴシック体の特徴の発現がまだ明確ではないとして、プロトゴシック体に近いという注意書き付きの「後期カロリング小文字体」として規定することもできる。
 - 13 ガイド・レターについては次の文献を参照。Michelle P. Brown, *Understanding Illuminated Manuscripts: A Guide to Technical Terms*, London, The J. Paul Getty Museum in association with The British Library, 1994, p. 64. 本資料のガイド・レターは、たとえば表面左上部の隅に記されたPAの文字が該当する。このガイド・レターは冒頭の単語Paulusの最初の二文字を表していると思われる。
 - 14 Cf. Michelle P. Brown, *op. cit.*, p. 111.
 - 15 青色と赤色の組み合わせは、あくまでも中世における聖人・キリストの衣服彩色の代表例であり、その他の色彩が同時代の写本で採用されている例はある。たとえば、大英図書館所蔵の写本Royal 2 C II のf. 69v.にはイニシアルの中に聖パウロの図像が描かれているが、そこでは緑色と赤色と無地の組み合わせで聖パウロの祭服の色が表現されている。
 - 16 Cf. Raymond Clemens and Timothy Graham. *Introduction to Manuscript Studies*, Ithaca, Cornell University Press, 2007, p. 29. なお、同書では“Many historiated initial bear no direct relationship to the accompanying text but rather afford the artist the opportunity to indulge a taste for the fantastic or to record interesting aspects of contemporary life, including details of scribal and artistic practice.”と断言されているが、この指摘が妥当であるかどうかは慎重に検討する必要がある。物語イニシアルがテキストと直接関係していないように思われるケースが現存する写本に多々見られるのは事実であるにしても、テキストと明らかに関連づけられた物語イニシアルも多く認められ、また一見すると関連がなさそうな物語イニシアルも現代の我々がテキストとの関連性を見つけていないだけという可能性も十分に考えられる。
 - 17 2021年度現在、西南学院大学博物館が所蔵している西洋写本は全10点である。いずれもラテン語写本の零葉であり、時代別の内訳は、12世紀写本が3点 (C-b-113, C-b-117, C-b-140)、13世紀写本が1点 (C-b-133)、1400年頃の写本が1点 (C-b-134)、15世紀写本が3点 (C-b-021, C-b-027, C-b-119)、16世紀写本が1点 (C-b-105)、17世紀写本が1点 (C-b-029) となっている。